MRIを活用した診診連携を進め、最期まで安心して暮らせる地域づくりを

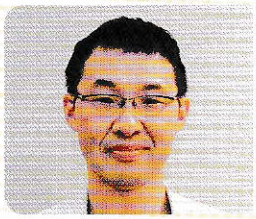
ちば内科・脳神経内科クリニックは兵庫県但馬地域の豊岡市で2020年に開設された。千葉義幸院長は脳神経外科医として蓄積してきた知識や経験、診療技術を地域に還元するとともに、但馬地域の住民が最期まで安心して暮らせるように医療・介護連携の推進を図っている。1.5テスラのMRIを活用した診診連携に取り組む一方で、NPO法人を発足させて幅広い職種、機関の人々とつながり、地域医療連携推進法人の設立をめざし活動している。

脳神経外科医のキャリアを生かすべくMRIを導入してクリニックを開業

脳神経外科医として腕を磨いてきた千葉院長の脳裏に、故郷での開業という考えが浮かんだのは2016年頃のことだ。「40歳を過ぎて、それからの自分のキャリアを考えたとき、手術や血管内治療の技術をさらに高めたり、論文執筆などアカデミックな研鑽を積んでいったりという選択肢もありましたが、培ってきたものを生まれ育った但馬地域の医療に還元したいと思ったのです」と千葉院長は振り返る。一般社団法人豊岡市医師会の親しい医師に話を聞くと、豊岡市は在宅看取り率が全国1位であるものの、かかりつけ医が高齢化していることが分かった。都市部の病院を出て地域に入り、それまで自分が診てきた脳血管疾患のリスクとなる高血圧、糖尿病、脂質異常症といった生活習慣病をプライマリ・ケア医という立場から管理することで、キャリアを生かすことができると考えた。相談した医師から言われた、「戻ってきたらダイヤモンドになれる」という言葉にも背中を押されたという。

そのために必要な内科の知識、在宅診療のノウハウ、地域包括ケアシステムの知識をいかに得るか考えていたときに、同市内の在宅療養支援診療所で訪問看護ステーションやヘルパーステーション等を併設する、たじま医療生活協同組合ろっぽう診療所から声が掛かり、18年に所長として赴任した。「在任中、内科疾患全般、認知症やうつ病などを改めて勉強し、小児科を含め実地経験を積みながら在宅診療にも取り組みました。また、豊岡市医師会の先生方、介護事業所、自治体の福祉関連部署などとの関係を深め、地域の患者様・ご家族に地域医療を行う医師として認知していただけるなど、私にとって非常に重要な時期でした」

同診療所には2年間という約束で勤務し、その間に開業するにあたっての具体的な戦略を練っていった。脳神経外科医、脳神経血管内治療医としての知識、経験を生かすという大前提のために、高性能のMRIの導入は必須だと考えて1.5テスラのMRIを備え、ちば内科・脳神経内科クリニックを開業した。



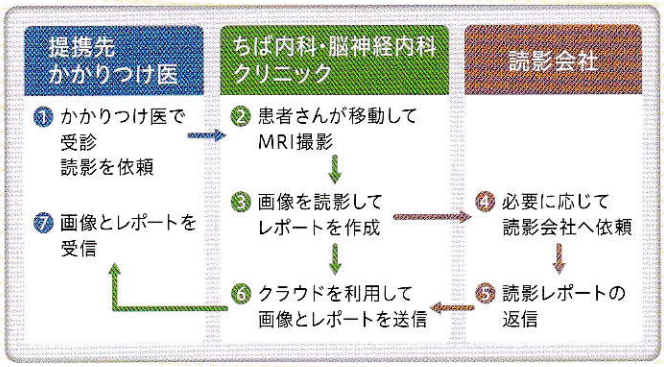
ちば内科・脳神経内科クリニック
院長
千葉　義幸 先生
2000年新潟大学医学部卒業。20年ちば内科・脳神経内科クリニックを開業し、現在に至る。

MRIを活用して診診連携を推進

千葉院長はMRIを活用した診診連携を迅速に行っている（図）。ちば内科・脳神経内科クリニックの提携先であるかかりつけ医から依頼を受けてMRI検査を行い、画像を読影してレポートを作成。クラウドを利用して画像とレポートを依頼元に送信する。病院でMRIを予約すると2～3週間待ちになることも多いが、同クリニックは患者さんの希望日にほぼ沿うことができ、依頼当日の撮影も可能だ。

「予約は電話かファクスで受け付け、『今から撮影して、結果を今日見たい』という要望にも応えられます。禁忌事項・留意事項の情報はあらかじめ提供してあり、依頼元の医師と患者様、さらに当

図　MRIを活用した診診連携



かかりつけ医から依頼を受けて、ちば内科・脳神経内科クリニックでMRIを撮影し、画像を読影してレポートを作成する。そして、クラウドを利用して画像とレポートを依頼元に送信する。読影は読影会社に依頼することもできる。（千葉義幸院長提供資料を編集部で一部改変）

クリニックでも確認するダブルチェック体制です。送られてきた画像やレポートを医師はご自分の診察室で見ることができます」

提携するかかりつけ医が同クリニックと同じ医療用画像管理システムを導入していれば、提携先は無料で利用できる。そうでない場合はCD-Rなどを介して共有する。

迅速さと使いやすさを兼ねたこのシステムの便利さを実感すると、依頼元のかかりつけ医も患者さんも喜んでくれるといい、「早期の的確な診断・治療に結びつく画像検査を介した診診連携は地域医療においてとても大切です」と千葉院長は強調する。

一方で、MRIの管理維持には莫大な費用がかかる。現在、提携先医療機関のおかげもあり、MRI検査の実施件数は月約270件に上るが、今後の保守費用や種々のリスクを考えると、決して安心できることはないという。しかし、千葉院長は、「私にとってMRIは専門性を発揮するためになくてはならないものです。リスクヘッジしながら価値の高い診療を提供しようと考え、着地したのがこのやり方でした」と話す。

MRI検査を数多く安全に実施するために、同クリニックには常勤の診療放射線技師が2人在籍する。看護師も5人(内パート2人)おり、他に臨床検査技師1人、作業療法士1人、事務6人(内パート2人)という充実したマンパワーでクリニックを運営している。中でも、千葉院長と共にクリニックの開業に向け奔走した福井秀男技師長と田中きよ美看護師長(**写真**)は次のように語る。

「千葉院長の但馬地域や豊岡市の医療に対する思い、将来を見据えた構想などに感銘を受けました。規模の大きい病院とは異なり患者さんと直に接することが多く、地域の中で医療を担っているという実感があり、多忙でも毎日が楽しいですね」(福井技師長)

「ろっぽう診療所で千葉院長と仕事をして、画像や科学的根拠に基づいた診断、治療に大きな信頼を感じました。在宅診療の行き帰りに話す地域医療への考えにも共感し、この但馬地域のいい意味での台風の目になって、新しい風を吹き込むお手伝いができたらと思っています」(田中看護師長)

病院の画像検査機器を有効活用する病診連携の道も模索

千葉院長はろっぽう診療所に勤務しているとき、公立八鹿病院のMRIおよび脳血流シンチグラフィーを同院と同診療所で共同運営する形で連携関係を築いていた。目的は同診療所の患者さんのメリットが一番だが、同院のMRIを最大限に稼働させ、収益をきちんと得られるようにすることにもあった。同じように、ちば内科・脳神経内科クリニックをはじめとする地域のかかりつけ医が地元の基幹病院との間で、その設備を共有できる仕組みを構築しようとしており、現在、脳血流シンチグラフィーは公立豊岡病院組合立 豊岡病院や公立八鹿病院と医療連携して共有している。

左から、千葉義幸院長、田野歩佳技師、福井秀男技師長、田中きよ美看護師長。(編集部撮影)

こうした病診連携は、急増する認知症の診断においても有用だと千葉院長は指摘する。

「認知症の鑑別診断でMRI、脳血流シンチグラフィーなどの画像検査を補助的に用いることが増えてきています」

しかし、但馬地域に認知症の専門医は少ない。高齢者の増加に伴い認知症が増えていくという問題もある。そこで、千葉院長は故郷に戻る前から将来を見据えて認知症の勉強を始め、同クリニック開設までに日本認知症学会認定専門医の資格を取得した。現在、同クリニックには認知症の患者さんが約300人通院しており、認知症は今後も増えることは確実であることから、病診連携の推進には期待が寄せられる。

但馬地域の医療の一体化をめざす

ちば内科・脳神経内科クリニックの患者数は1,000人を超えているが、千葉院長は隣の養父市にある公立八鹿病院で月曜日午前の外来診療を担当している。同じ但馬地域の病院で診療することが、但馬地域の医療を一体化することにつながると考えているからだ。

「地方の場合、医療需要は今後25年で80%にまで減量し、一方、介護需要は100%の状態が維持されると予測されています。人口が半分になり、高齢化率が50%に近づく地域で最期まで安心して暮らせるようにするには、医療資源を介護資源に再分配しなければならず、これは医師会、歯科医師会、薬剤師会、介護支援専門員協会、行政などが一丸となって取り組まなければ実現しません」

そう語る千葉院長は、将来、二次医療圏の但馬地域に地域医療連携推進法人を設立しようと活動を始めた。19年11月に地域医療連携推進法人 日本海ヘルスケアネットの栗谷義樹代表理事を招いて第1回但馬地域医療連携シンポジウムを開催し、20年3月には"NPO法人 但馬を結んで育つ会"を設立、代表理事に就任した。21年1月に第2回但馬地域医療連携シンポジウムをビデオ会議システムで開催。地方独立行政法人山形県・酒田市病院機構 日本海総合病院の島貫隆夫病院長に講演を依頼し、養父市長も交えて但馬地域の医療・福祉について議論する場をつくった。参加者は但馬全域の医療・福祉関係者で230人を超えた。

「これから30年間はこの地域に貢献するという覚悟で開業しました。さまざまな職種、機関、そして但馬地域に暮らす皆様に対して、『この地でこれからも安心して暮らしていけるようにするために私が旗振り役になるので、共に歩み、支えてください』と呼び掛けながら取り組んでいきたいと考えています」と千葉院長は語る。